

幻想郷に厨二病が転生

からかさ@卍傘

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、神によって幻想となった一人の少年の物語。

目次

	多分これはオープニング	1
	それじゃあこれはプロローグ	6
	引つ越し直後って周りに馴染めない事多いよね	
	1話 目が覚めたら襲われたから検証するでござるの巻	10
	2話 第1村人発見	15
	3話 ママ巫女降臨	20
	4話 初めてのスペルカード	24
28	5話 宴会で交流を広げようの会	
	キャラ紹介のコーナー	38
	明けない夜は無い	
	6話 異変始動	42
	7話 蓬菜の姫	48
	8話 永琳が欲するもの	54
	他の人の引つ越しを手伝う事って無いと思うんだ	
	9話 お怒り、帰宅、引つ越し	
	58	
	10話 お引つ越し完了	64
	11話 家族が増えるよ	70
75	12話 新しく母と姉ができました	

13話 カミングアウト ————— 82

14話 連絡をとる ————— 87

キャラ紹介のコーナー2 ————— 91

年下に説教されるとびつくりする位反

省する

14話 お説教タイム ————— 97

15話 最後の晩餐は自分は食わない

————— 102

キャラ紹介のコーナー3 ————— 109

別れ、悲しみを乗り越えて人は強く

なっていく

最終話 別に今生の別れって訳じや

ねえんだ ————— 113

多分これはオーブニング

神様転生。それは、神様がうっかりミスをして自分は殺され、代わりに異世界に転生させてくれる、というあれだ。

しかし、それは幾ら願っても祈っても現実ではありえない、ある筈がない。

だがここに一人、その存在を信じ続ける男がいた。

名前は「滝沢 紅たきざわ こう（13）」

彼は重度の厨二病であり、さらにオタク・ロリコン・童貞と三拍子揃ったキモオタだった。

だが、そんなクズの鑑のような彼は、ある日死んでしまう。

「えーっと、今日の死亡人数は約3万人、生まれたのが約4万5千人・・・よし、まだプ

ラスだ」

「お、この人凄い死に方してるな。よし、暇潰しに転生でもさせてあげよう」

少し時間は遡る。

「ふふふ、やはりカップ麺は至高の食料なり。．．．超うめえ」

ここで独り言を呟きながら実に旨そうにラーメンを啜るこの少年は滝沢紅。

そう、まさに後10分程で死んでしまう可哀想な人間である。

彼は、中学生であるにも関わらず、親を離れ一人暮らしをしていた。

「唐突に塩ラーメンが食べたくなってきた」

今まさに醤油ラーメンを食べていた少年はそう言い残すと、財布を持ち家を後にした。

家から5分程度の所にあるコンビニには、大量のカップ麺が置いてある。

その中から塩味だけを根こそぎ取ってレジに向かう。

2300円。カップ麺のみを買っているととても思えない値段だ。

大量のカップ麺が入った袋を持って店を出ていく少年はとてもいい笑顔をしていた。
だが。

次の瞬間には、少年は宙を舞っていた。

少年は状況を理解出来ずに、宙に舞っている状態のまま辺りを見回す。

視界に映ったのは、先程まで買い物をしていたコンビニと。

叫び、近づいてくる人間と。

自らの血で紅く染まるトラック。

少年は、ようやく「自分が追突された」ということに気づく。

そして、少年は自らが死ぬということも同時に理解した。

少年は後悔した。

それは、親に暫く会ってないことではなく、タイミング悪く外出したことでなく、彼の後悔はたった一つだった。

「この大量の塩ラーメンを食べていない。」

それだけだった。

少年はオタクなのでラノベやゲームを非常に大切にしていたが、

それ以上に、ラーメンに愛情を注いでいた。

彼は自らの命より、ラーメンの方が大事だと。

そう考えているのだ。

まあ、ラーメンの話はこの辺りにしておいて。

少年は薄れゆく意識の中でこう願った。

異世界に行きたい、と。

そんな厨二病の彼の願いが届いたのか、それとも只の偶然なのか。
一人の神が彼の資料に目を止める。

「お、この人凄い死に方してるな。よし、暇潰しに転生でもさせてあげよう」

それじゃあこれはプロローグ

・・・ここは何処だろう。

さつきトラックにはねられたと思っただらなんだこれ。

超女の子の子してる部屋で寝てるぞ俺。すげえピンクだ。

んで、声も出ないぞ何だこれ。夢かそうか夢か

「んう・・・」

(・ ・ ・) (・ ・ ・) ((; ・ ・))

何故だ・・・何故隣で幼女が寝ているんだ

おおおおお落ち着けまだ慌てるような時間じゃないそうだと素数を数えて強くなるう
1. 3. 5. 7. 9. 12. 15. 18. 21じゃない、これはただの奇数だって違う
違う落ち着け深呼吸しろすーはーすーはーすーはーうわあ良い匂いじゃねえよアホか落ち着
けつつつてんだろふう・・・

よし、落ち着いた冷静に今の状況を把握しよう

・気が付いたらこの部屋のこのベッドで寝ていた

・声が出ない

・隣で幼女が寝てる

・・・うん、早く夢から醒めよう、うんそうしよう

「ふああああ、あ、おはようございませす〜」

うわあ幼女目覚めちゃったよどうすんのこれマジで。

「失礼な、私は幼女じゃなくて神様なんですよ〜」

・・・神様？何言ってるんだこの幼女。てか心読まれた気がするが気のせいかな？

「気のせいじゃありませんよー、あとその幼女呼び止めて貰えませんか」

まあどうでもいいや。んで神様、なんで俺はこんな所にいるんだ？

「こんな所とは失礼ですね。まあいいです。貴方には異世界に転生する権利を与えよう
と思うのです」

ゑ？マジで？でもどうして俺が？

「貴方の死に方が面白かったからです」

え、俺どんな死に方したんだ。

「それはですね・・・あ、時間が押してきたんでまたこんど」

ええ〜、・・・まあいいか・・・

「それで転生しますか？しないですか？」

ああ、もちろんするさ。

「じゃあさつきと輪廻の輪から魂抜いてしましましょう」

えっ？そんなことすんの？大丈夫？

「終わったんでじゃあテンプレ通り特典決めちゃって下さい♪あ、3つまでですよ」

あ、その前に行く世界決めた方が良くないんじやない？

「あ、そうですね。じゃあどこに行きますか？二次元だろーが四次元だろーが何でもござれです！」

おっマジか、じゃあ幻想郷で。

「幻想郷ですな、分かりました。時期の指定とかありますか？」

おっ、そんなのも決めれるのか。じゃあ妖々夢終わった辺りで。

「わかりました。それじゃあ特典をどうぞ！」

・・・なあ、これってどんなチート特典でも良いの？

「良いですけど、あまりにチート過ぎると特典の数を減らさなきゃいけないかもです」
分かった、それじゃあ「想像を現実にする能力」をくれ。

「これまたチート中のチートを選んできましたね、楽しみですよ」

俺はチートで無双する系のやつが好きだったんだ。あ、特典はこれ1つで

「はい、わかりました！それでは特典をどうぞ！」

うおっ早いな

「これでも私、神様ですから！エッヘン！」

あらかわいい

「褒めても何も出ませんよー。あつ最後に、貴方の魂はもう輪廻の輪から外してあるの
で、何時でも他の世界に転生できますからー」

果たしてそれは転生と言えるのだろうか・・・

「こまけえこたあいいんだよ!!ですよー」

はは、そうかい。

「そうですよー！じゃあ今扉創ったんでここに入ればめでたく幻想入りですよー！」

ああ、ありがとう。それじゃあ、とびこめ〜わあい〜

「あ、あの能力なら大丈夫だと思いますけど、出るとこ無縁塚ですから〜！つてこれ聞こ
えてるのかな・・・」※聞こえてません

引つ越し直後つて周りに馴染めない事多いよね

1話 目が覚めたら襲われたから検証するでござるの巻

目が覚めたら知らない天井・・・ではなく、なんとも禍々しい紫色の空が視界に入った。

うわあ何だよここ。神社の裏じゃねえのかよ普通そこだろ。

「ちやんと幻想郷に入れてんのかよこれ・・・あつ喋れる」

とりあえず俺は辺りを探索することにした。

周りを見渡すとガラクタが至るところに落ちている。

それはブラウン管やブリキのおもちゃなど、昔に良く見かけた物ばかりだ。

ある程度原作を知っている俺はすぐに今いる場所が理解できた。

「ここはあれか、無縁塚か。あれ？やばくね？」

そう思った瞬間、地面から小さい触手のような植物が生えてきて俺に襲いかかってきた。

「やばいやばいどうするどうするあつそうだ特典ー！」

俺は咄嗟に目を瞑り目の前の触手が爆発するイメージを頭の中で必死に作った。

するとどうだろう。本当に爆発が起きて触手は爆散してしまった。どうやらあの幼女は本当に特典をくれたらしい。

「ていうか貰って無かったな早速ゲームオーバーだったな・・・」

さて、まずは自分の能力を理解して使いこなせるようにしないと。

とりあえず能力名を能力使って検索してみる。

『想像を創造する程度の能力』

おお、便利だな。てゆーかダジャレかよ。

まあつまり創造ってことは無から有を生み出せるって事で良いのかな？かな？

とりあえず修行でもしよう。さっきのより強いのを来たら死ぬからな。

取り合えず目の前に何か空間を・・・出来た、本当便利だなこれ。やっぱチートや。外側から一切の干渉を受け付けないようにしておこう。

よし、じゃあ中に入って、っと

あれ、本当に何でも出来るのかこれ。じゃあやりたかったあれが出来るじよのいこ！よし、すぐやろう今やろう。

「我が名はダークフレイムマスター……闇の炎に抱かれて消えろッ!!」

それとともに手を前につき出すと、手から暗黒の炎が！やったぜ！

「フハハハハ！やべえこの能力最高だ！」

「よっしや次だ次！」

「滲み出る混濁の紋章、不遜なる狂気の器、湧きあ（ry

破道の九十！ 黒棺 ー

うおつやべえこの能力最強過ぎるまさか黒棺まで出せるとわ！

あ、そうだ楽しむのも程ほどにして、もっと検証しないと。

（三時間後）

この三時間で試した結果を纏めるぜ！

- ・知ってる技はほぼ全て使える。
- ・身体能力強化、敵弱体化も出来る。
- ・物体、生命の創造が出来る。
- ・能力も創れる。

・他の生物に創った能力を渡す事が出来る。

結論：チート過ぎてヤバイ。

なんだこれ何でも出来るじゃねえか！これで無双できるぜヤツハー！

とりあえず自分に永続エンチャントしとこう。

えっと、身体能力はノゲノラの獣人種ワビーストの血壊の3倍、

んで、霊力と妖力と魔力を全て使えるようにして、その量を大体10万倍位にしとくか。

インフレ過ぎ？気にすんなそういう小説なんだ。

おお、すごい量になったぞ、これ制御出来るようにしないと速攻退治されてまう。

えっと、武器・・・は別にいいか。素手でええやろ。

能力は、新しく「能力をコピー出来る程度の能力」を創ろう。成長するチートってな

んか素敵やん？

えっと、じゃあ霊力とかを全部一般人並みまで封じ込めて、自分の意思で解除、封印が出来るようにしようか。

それじゃあ、外に出ようか。

うおっ、もう暗くなってる。いや元々暗いけど。

しーない、誰かに拾って貰う事を願って野宿するか。

悪意を持ったものにだけ発動する結界みたいなのを張って、それじゃおやすみー。

2話 第1村人発見

「店の在庫が無くなってきたな。」

そう呟く男は森近霖之助。半妖である。

「そろそろ行かないとだめかあ・・・」

そう言うとは彼は一本の剣を携え、出掛けていった。

（霖之助 side）

「店の在庫が無くなってきたな。」

全く、いつもいつも魔理沙がツケだと言って物を持って行ってしまわなければもう少しもったかもしれないのに。

あそこが一番良いものが落ちてるんだよな、危険だから行きたくないんだけどな。でも・・・

「そろそろ行かないとだめかあ・・・」

く無縁塚く

それにしてもこの剣は良く斬れるな、妖怪が豆腐のように斬れる。

「^{アメノハバキリ}天羽々斬・・・だったかな？」

この前拾ったけど、剣以外の使い道がまるで分からない。霊力があるから宝具とかだとは思うけど。

「うーん、今回は外れか？・・・おや？」

人が倒れている！・・・いや、寝ている？何だろう、道具と一緒に入ってきたのか？まあなんにせよ、連れて帰らないと危険だからな。それに良く見たらこんな子供じゃないか。

とりあえず僕の部屋の布団に寝かせておけばいいかな。

（紅side）

知っている紫の空・・・じゃない、知らない天井だ。

どうやら上手く拾われたらしい。ここは普通の子供を装おう。なんたつて13歳だ。普通じゃなきや不自然だ。

「おや、目が覚めたようだね。」

あれ？男の声だ。声の方には、白髪と眼鏡が特徴の若い男が立っていた。霖之助か。

「あの、ここは・・・？」

あくまで何も知らないという素振りで聞いてみる。

「ここは香霖道。僕の店さ。」

「香霖道？聞いたこと無い・・・」

「おや、じゃあ君はやっぱり新しく幻想入りしたんだね」

「幻想入り？」

「ああ、ここは幻想郷といって、外の、君が元いた世界から隔離された場所さ。と言つても、すぐには信じられないだろうけどね。」

やはり上手く幻想入り出来ていたようだ。やっぱり神なんだな。あの幼女。

「君は元の場所には戻りたいかい？」

唐突に霖之助がこんなことを聞いてきた。さて、どうしよう。こうしよう。

「戻りたく……無いです。」

「へえ、それが何でなのかはあえて聞かない事にするよ。」

「はあ……」

「それじゃあ、こうして出会ったのも何かの縁だ。君の面倒を見てくれそうな人の所まで送ってあげよう。世の中物騒だからね。」

「え、そ、そんな悪いですよ。それにお店はどうするんですか。」

「ああ、店なら心配いらぬさ。店番がもう一人いるからね。おい朱鷺子ー！」

「……どうしたの？」

頭から羽をはやした女の子がでてきた。たしか彼女は「名無しの本読み妖怪」だったはず。朱鷺子って呼ばれてるのか。あ、そういえば妖怪だ。驚いところ。

「……!？」

「あ、言っていないかったね。この幻想郷では妖怪とかの色んな種族がいるんだ。それで朱鷺子、この子を神社まで送ってきたんだけど、店番頼んでいいかい？」

「……わかった。」

「ありがとう。じゃ、いこうか。そうだ、君、名前は？」

「……紅。滝沢紅。」

「紅か。良い名前だ。宜しく、紅。」

話の流れ的に博麗神社に行くのか。守矢神社は時期的にまだ無いだろうし。俺の冒険は、始まったばかりだ!!完ッ!なんつって☆

3話 ママ巫女降臨

「紅、取り合えず今から行く場所でこれからどうするのか考えればいい。」

香霖・・・霖之助にそう言われて店を出てきた俺は、今は妖怪獣道を通っている。

あ、どうも。みんなのアイドル紅ちゃんだよ。男だな。

そーいや忘れてたけど能力コピーしとくか。

『道具の名前と用途が判る程度の能力』かあ。対して使えんな。

あつ、マジックアイテム作成技術も手に入ってる。この能力技術もコピー出来るのか。

「おつ、見えてきたよ。あれが今向かっている、博麗神社だ。」

お、本当だ。でかいな。鳥居が。

石段を登るとそこには・・・

く博麗神社く

「着いたよ。さて。おーい、霊夢ー！居るかー？」

そう霖之助が叫んだら神社の中から赤い巫女が出てきた。

「はいはい、居るわよー。あら、霖之助さんじゃない、珍しいわね。何か用？」

「ああ、この子についてなんだが。」

そう言つて俺の肩に手を置いてきた。

「は、始めまして……」

「ん？どうしたのよこの子。まさか誘拐？」

「違う違う。新しく幻想入りしてきたんだ。無縁塚に落ちてたんだ。」

「へえ、良く無事だったわね。それで？この子を外に送り返せばいいのかしら？」

「それも違うね。この子に弾幕を教えてやって欲しいんだ。」

え、なにそれ聞いてないぞ。

「弾幕……？」

「そう、弾幕。霊力の玉みたいなものさ。」

「あら？良いのかしら？何時もだったら『乙女の遊びに男が入るなんて無粋だー』とか言ってるのに。」

「まあまあ。ある程度護身できる位で良いから。頼むよ。」

「まあ良いわ、私もちようど暇してたし。私は霊夢。あんたは？」

「滝沢、紅・・・です」

「そつ、じゃあ紅。まずは弾幕について教えてあげるわ。」

「宜しくお願いします、霊夢さん」

「あ、敬語とさん付けはやめて。そういうの好きじゃないの。」

「分かった。霊夢。」

「よろしい。じゃあまず、弾幕って言うのはね——

——つて事何だけど、わかった？」

「まあ、何となくは・・・」

「何となくでも分かってくればいいわ。じゃあ次。霊力を使いこなす為の訓練」

「難しそうだね・・・」

まあ本当はもうバッチリなのだが。

「慣れれば楽よ。まずは手のひらに力を集めるイメージをしてみてください。」

「えっと、こんな感じ・・・かな？」

「あら、上手いじゃない。霊力も普通の人より多いし、才能あるかもね。」

うっそだろお前。これでも霊力0.1%位に絞ってるんだぞ。チート過ぎるだろ俺。

「じゃあ、次はそれをためしに飛ばしてみて。そうね。あの岩が良いかしら。」

「えい」

すると、岩が小さく窪んだ。

「威力はまあまあね。」

そりゃそうだ。全力で手加減してんだ。

そして霖之助は俺と霊夢をそんな微笑ましそうな目で見るな！止めろ！

まあそんなこんなで弾幕の練習は暫く続いた・・・

4話 初めてのスペルカード

「じゃあ最後。スペルカードね。」

「すぺるかーど?」

「そう、スペルカード。必殺技だと思ってくれていいわ。」

お、やっとか。

「これは聞くより見た方が良いわね。じゃあ見ててね。」

すると霊夢は、岩に向かって一枚のカードを構え、

「霊符『夢想封印』!!!」

すると、7つ程の大きな光弾が岩に向かって飛んでいった。

俺はその速度、大きさ、威力などを速攻で解析した。うん、便利だから解析用の能力も創っておこう。あ、今のは解析した自分を想像しただけね。

「まあ、こんな感じに弾を組み合わせるだけだから、想像力があれば簡単よ。」

「そういうものなのかな・・・」

そう呟くと、

「やい、霊夢さん!今日は正面から勝負だ!」

「今日こそ打ち負かしてやるんだから！」

「だ、大丈夫かなあ……」

上から、サニー、ルナチャ、スターだった。

「あら、あんたら、いいタイミングで。紅、こいつら相手にどこまで戦えるか試してみなさい」

「え、わかった」

「ん？今日の相手は新入りなの？まあ良いわ！子供だからって容赦しないわよ！」

「私たち光の三妖精の力、見せてやるわ！」

「やり過ぎないでね……」

その一言（ずつ）で、戦いが始まった。

サニーは火炎弾、ルナチャはレーザー、スターは米弾とバランス、チームワークも上手く取れている。……だが無意味だ。

「よっ、ほっ」

全てギリギリでかわしていく。楽しい。

「キー！なんで当たらないのよー！」

「避けてるからだよ。さて、そろそろ終わらせようか。」

「そんなこと出来るの？今まで一回も私たちに攻撃出来ない貴方に！」

「出来るさ。——スペルカード」

「!?!」

霊夢と、完全に空気になっていた霖之助が驚いている。こんな早くスペカを思い付いたからだろう。だが、本当は違う。ちよつと借りた^{パクった}だけだ。

「模倣『夢想封印』」

俺の体から15個程の、霊夢の大体倍の量の光弾が三人に向かって飛んでいく。

「えっ、それって霊夢さんの技じゃん!」

「しかも結構強化されてない!?!」

「オリジナル超えとかどういう・・・」

ドオオオオオオオオオオオン・・・

大きな音と共に光弾が炸裂する。

煙が引いてきたらそこにはとても大きなクレーターと目を回してる三妖精がいた。能力コピーしとこう。

「・・・ねえ、紅。今のは何?」

「え、夢想封印を真似したんだけど。」

「あ、そ・・・」

「と、とりあえず僕は帰るよ。あんまり朱鷺子を待たせても悪いしね。あ、そうだと霊夢。この前頼まれたお祓い棒。はい」

「あら、ありがとう。とりあえずあの子の事はわかり次第そつちに伝えるようにするわ。」

「ああ、助かるよ。それじゃあね。」

そのあいだに俺は、能力でクレーターを元に戻していた。

5話 宴会で交流を広げようの会

〈靈夢 side〉

家に紅が来てから3日。紅は神社に居候している。

「……紫、ちよつと良いかしら。」

「あら、どうしたの、靈夢?」

何も無い所に向かって話しかけると、一人の女性が出てくる。

「あなたの事だからどうせ、全部見てたんでしよう? 教えなさい、あの子のこと。」

「あの子の事は私にも分からないわ。少なくとも、幻想郷に入っていた事に気づけなかった」

「あんたほどの妖怪が気づけなかった? ……どういうことよ?」

「恐らく、私より高位な妖怪か、高等な神の干渉によるものでしょうね。」

「前者はまず無いんじゃない?」

「そうね。私より高位な妖怪なんてそうそういないし、妖怪の干渉だったら靈夢が気づくはずだもの。」

「まあ、それはいいわ。それより、あの子の能力よ。」

「何かあったの？ 私途中で飽きてしまったからテレビ見てたのだけれど。」

「あんたねえ・・・真似られたのよ。夢想封印を。しかもたった一回見せただけで。」

「・・・それは本当なの？」

紫の眼が鋭くなる。私を貫いてしまいそうなほどに。

「ええ、本当よ。しかも真似だけじゃなくて強化もされていたし、完全に使いこなしてた。」

「・・・わかった、あの子の脳内を覗いてみるわ。」

「多分あの子も能力持ちだと思っから、そこを詳しく。」

（紅side）

「うーん、どうするか。」

ウィツス、紅だ。今はな、もつと交流関係を拡げた方がいいと思うんだ。

妖々夢後だから紅魔組と冥界の二人と接点ないからなあ。

あ、そうだ。霊夢に頼んで宴会でも開いてもらおう。材料は創ればいいし。

ん？後頭部に妖力の気配が・・・ああ、隙間か。そりや一発で模倣したら疑われもするわ。

あんま見られたくない情報もあるし、大事な情報は干渉不可領域に設定しておこう。能力は、まあ別にいいか。

よし、あたかも偶然を装って紫さまとエンカウトしよう。

「おーい、霊夢〜」

「えっ!?あ、ああ。ええ。どうしたの?」

めっちゃ動揺してる。おもしれえ。宴会の事は知らない風で行こう。

「幻想郷ってなんか祭りみたいなのってあったりする?」

「え?たまに宴会を開いたりするけど・・・そうね、紅の歓迎会もかねて一回開きましたよか。」

よし、上手くいった。ほんと上手いこと動いてくれるなこの人。

「え?!マジで、やったー!俺その手の事大好きなんだ!」

嘘ではない。騒がしいのは割りと好きだったりする。

「ふふ、じゃあ今晚にでも開きませうか。ちよつと人里まで食料と酒買いに行つてく

れない？」

「わかったー、じゃあ行ってくるー」

そう言い残して俺は空を飛んで人里に向かった。勿論霊夢の能力だが。

「・・・あの子いつのまに飛べるようになってたのかしら」

ちなみに紫さまは俺が霊夢に声をかけた瞬間に消えてしまった。残念。

く人里く

「肉、魚、野菜類は全部買ったし・・・」

後は酒か。流石にこの姿（13歳）で酒を買うのはまずい。

路地裏に入って変身しよう。・・・えーっと鏡はーつと。

オーケーオーケー。しっかり大人の男だ。

酒も買って俺は博麗神社に戻った。飛んでる途中で姿は戻しといた。

〈霊夢 side〉

「・・・で、紫。どうなの。あの子の脳内は。」

「そうね。誘導されている気分でいささか不愉快だったわ。」

「と、言うのと？」

「記憶の一部が不可侵領域になつていたのよ。まるで覗いているの知られているかのよう。」

「あんたが干渉できないほどの領域ねえ・・・」

「安心なさい。能力は見れたわ。」

「そんなに重要じゃないのかしら。」

「それがそうでもないっばいわ。・・・能力名は、『想像を創造する程度の能力』。性能は恐らく幻想郷最強よ。神すら余裕で下すでしょうね。」

「何よそれ・・・とんでもないじゃない」

「おーい、霊夢ー、帰ったよー」

「あら、じゃあ私はこれで。」

そう言うとき紫はスキマの中に消えていった。

「早かったじゃない。ありがと。」

まあこの子は敵意が無いみたいだし、今はまだ大丈夫か。

（紅side）

夜

『さくて今回は歓迎会も兼ねた宴会と言う事で進行は私、射命丸文でお送りいたします
！』

うーわ、テンション高いなあやや。つか、人多いなー

『それでは早速、今回の主役の入場です！どうぞ！』

入りずれえよアホ。まあいいか。

「えー、滝沢紅です。宜しくお願いします。」

『さて、主役が自己紹介もしてくれましたし、それでは宴の始まりだあああああああ!!!』

「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」」

結局こいつら騒ぎたいだけか。とりあえず俺は適当に座る。

「私は霧雨魔理沙だ。よろしくな、紅」

「はい、宜しくお願ひします」

「おーつとお、礼儀正しい事は良いことだが、今ここにいる奴等は皆タメ口の方が喜ぶぞお〜?」

「あ、そう?じゃあ改めて、よろしく魔理沙。」

「ああ、よろしく」

そんな感じの会話を数人(主にーボス)と話していると、お嬢様、レミリア・スカーレットがこつちに近づいてきた。

「私はレミリア。スカーレット家の当主よ。よろしく。紅。」

「よろしくお願ひします、レミリアさん。」

「うーん、なにか面白味に欠けるわね。そうだ、あなたの特技なんかを見せて貰えるかしら?」

「特技?特技ですか・・・うーん・・・」

そう俺が考え込んでいると、空から金髪の少女が落ちてきた。

「ちよつとお姉さま!また私のプリン勝手に食べたでしょ!もう何回めだと思ってるのよー!」

「あら、しょうがないじゃない。食べたかったんだもの」

「うがーっ！もう許さないんだから！」

そう叫んで金髪の少女・・・フランがレーヴァテインを作り出した。

「わーっ！ちよ、落ち着いて！プリンなら俺が作ってあげるから、ね？」

俺がそう叫ぶとフランは途端に目を輝かせて、

「え!?本当!?!」

「うん、本当だよ。両手を前に出してみて。」

「?ことう?」

フランが両手を前にだす。俺はレミリアの方を向いて、

「じゃあ、ここぞで俺の特技のお披露目としますね。」

と言い、指を鳴らす。すると、フランの手のひらに少し大きめのプリンとスプーンが

出てきた。

「おおー!すごい!じゃあ、いただきまーす!!」

そういつてフランは目の前のプリンを食べ始める。味の設定も出来るから、相当美味しく出来ている筈だ。

「!?すごい!超おいしーい!!」

満面の笑みだ。よかった。

「へえ、それが貴方の能力?」

「はい、俺の能力は『想像』したものを『創造』する能力なんです。妹さんとは正反対になりますかね。」

「・・・フランの能力のこと、言ったかしら。」

「いえ、ですが分かるんですよ。創造と破壊、概念は近いですからね。あ、正反対と言っても能力同士が反発しあう、なんて事無いんで大丈夫ですよ。」

「あらそう。安心したわ。」

「おにーさん凄いな!!名前は何て言うの?」

「俺は紅。滝沢紅だよ。」

「へえー、よろしくね、紅!」

「うん、よろしく。」

紅魔組と話せた、と言うのはとても大きな収穫だ。

そんなことを考えながら何となく上を見上げると、とても大きな月が見えた。

——?何だ、この違和感は。何かが、おかしい。

どこだ。どこかにおかしい点が・・・ 見つけた。

運良く他の人たちは気づいてないみたいだ。

——
あれは本物の月ではない。

キャラ紹介のコーナー1

滝沢 暁（13）

神様によつて転生した中学二年生。チート能力を持っている。

厨二病の為か演技力が高く、人を騙す事も簡単に出来る。

厨二病以前からも周りに影響されやすく、時々口調等を変化させていた。

自分の死にかたが面白いと言われたが、それとなくかわされたので気になっている。

能力名は『想像を創造する程度の能力』。

相手にプレッシャーを与えたい時には『全能』と呼ぼうと決めている。

実際ノースクハイリターンなチート能力だから間違つてはいない。

想像や妄想の他に、記憶と料理が得意。

でもぶつちやけ両方能力でどうにかなる。

嫌いなものはリア充。

森近霖之助（？）

半分人間半分妖怪の妖怪。博麗大結界がつけられる以前から生きていた。面倒見が良く、優しい。ほっとけない性格。

「香霖堂」という骨董品店を営んでいる。

それ以前は霧雨魔法店で修行をしていた。

もともと天叢雲剣を持っていたが、この小説では無縁塚で天羽々斬も拾っている。

マジックアイテムを作る技術を持っており、魔理沙の八卦炉や霊夢のお祓い棒、もつと言えばこの先早苗さんも幣を作ってもらうがそれはまた別のお話。

好きな物は古い物、嫌いな物は泥棒（ただし魔理沙は除く。）

霧雨魔理沙（18〜20）

宴会の席で紅と知り合った。性格はフレンドリー。

霖之助の事を「香霖」と呼び、幼馴染みのような感覚で慕っている。

魔法は、魔力を直接魔法に変換するものではなく、

道具や媒体を通して魔法に変換するもののため、パチュリーなどには遅れを取っている。

今後出てくるかは不明。魔理沙ファンの皆ゴメンね！きつとだすよ！

レミリア・スカーレット(500)

宴会で紅と知り合った。500歳の吸血鬼。

運命が分かるため、月の異変にも気がついてはいるが、特別害があるわけでもないの
で無視している。

フランに対しては普段そっけなくしているが、本当はとても大切にしている。

なお、この小説ではカリスマブレイクはしません。

好きな物は紅茶。嫌いな物はにんにく。食べれない訳では無い。つおい。

フランドール・スカーレット(495)

可愛い。ヒロイン候補一人目。紅にはロリコン属性もついているため、フランを可愛
いと思っている。フランも、紅にとっても良くなつており、時折神社に行つては遊んで
いる。可愛い。

495歳ではあるが、そうとはまず思えない程の可憐さと美しさを兼ね備えている。
可愛い。

ありとあらゆる物を破壊する程度の能力は、物の『目』を移動させる能力で、どんな

物にも目はある。目と言うのは、ほんのすこしでも衝撃が加わればその物が壊れる、そんな場所。

フランはそれを手のひらに移動させているから握るだけで粉碎する。簡単に言えば遠距離のフタエノキワミ。強い。

好きな物はプリン。嫌いな物は十字架。別に触れない訳では無い。

明けない夜は無い

6話 異変始動

さて、もう永夜異変開始か、案外早かったな。

オツス、紅だ。さあ、これからどうしようか。折角の異変なんだから、面白可笑しくしていききたい所だけどなあ・・・

よし。先に永琳に知らせてしまおう。そうと決まったら早速出発しよう。昨日の宴会でまだ潰れてる奴には一応二日酔いの予防魔法かけておこう。

「霊夢ー、いつてくるー・・・って起きてないか。」

俺は永遠亭に向かった。

く迷いの竹林く

さて、迷った。

迷いの竹林の名は伊達じゃないな。なんだこれ。

うーん、行っても行っても同じに見える・・・お、家が見えた。

もこたん家か。案内してくれないかな。

「すみませーん、誰かいませんかー」

「ん？どうした坊主、迷ったか」

良し、留守じゃなくて良かった。

「はい、ちよつと永遠亭に用があつたんですけど・・・」

「まあここは迷いやすいからな、私が案内してやるよ。ボランティアでやってんだ。」

「本当ですか!?!ありがとうございます!」

「ああ、じゃあ行くぞー」

〈永遠亭〉

「あれが永遠亭だ。おーい、うどんげー!客だぞー!」

「ああ、はいはいちよつと待ってくださいねー」

中から物音が聞こえてきた。急いで片付けている感じた。

「はい、どうぞー」

俺は永遠亭の中に入った途端空気が変わったのが分かった。なるほど、これが『永遠』か。

「えつと、八意先生に用があつて来たんですけど・・・」

「ああ、八意先生ですか、今はちよつと留守にしてるんですよ。」

「あ、そうですか。じゃあ出直して来ますね。あ、一応風邪薬下さい」

「はい、貴方は今は風邪引いてないみたいなので、予防用の薬出しますねー。」

「ありがとうございます」

「250 銭になりまーす♪」

俺は金を払って薬を貰い出てきた。

あのうさみみ・・・うんげが言っていた事は、嘘だ。

奥にしつかり3人の気配を見つけた。永琳と輝夜とてゐた。

構造もしつかり把握したので、裏口から侵入しよう。どんな生物にも感知出来ないレベルの意識遮断魔法をかけて、『永遠』にも見つからないようにする。

さあ、侵入だ。

↳最深处↳

俺は今、八意永琳の真後ろにいる。

「はあ、暇ねえ・・・」

随分暇そうにしている。

「うどんげも心配性なんだから。なにも、昼まで外出禁止にすることないじゃない」
なるほど、そういうことか。

「そうですよねー」

「!？」

いきなり後ろから会話に参加されたら誰だつて驚く。俺だつて驚く。

「貴方、どうやってここに入ってきたの？」

「まあまあ、それより俺とお話でもしましょうよ。」

「・・・話の内容は？」

相当警戒しているが、一応聞いてくれるんだ。優しい。

「そうですね、今貴女が起こしている異変について、などいかがでしょうか。」

「・・・わかった。一応聞くだけ聞いてあげるわ。」

「ありがとうございます。それではとりあえず、」

と、一呼吸置いて話し始める。

「貴女がやっている事は、すべて無意味だ。と言っておきましようか。」

「どういう事かしら？」

「この幻想郷には博麗大結界があります。月の民は入ってこれません。」

「・・・それで？」

「唯一結界を破れる綿月豊姫も今回は動くつもりは無いようですし、安心して異変を止めてくれてもいいんですよ?と言っても急に止めたら妖怪が納得しないと思いますし、今晚巫女が攻めこんで来ますので、それに敗北した、と言うことにすれば良いと思いますよ。」

すべて本当だ。能力で検索したから間違いない。

「・・・貴女は何者なのかしら？」

「さあ?少なくとも、貴女の味方ではないが敵でもない、とだけ言っておきます。」

「・・・そう。一応信じてあげるわ。」

「ありがとうございます。御座います。あ、最後に、ここに俺が来た事は無かった事にしておいて下さいね。」

「分かったわ。」

「それでは、また今日の晩にでも会いましょう。八意XXさん。」
「そう言い残して俺は外に瞬間移動した。」

7話 蓬菜の姫

「よし、やることやったし、後は見るだけだな。」

「あら、紅。どこ行ってたの？」

「ん、暇潰しに人里。」

「あ、そ。」

今日はぶつちやけ夜まで何もしなくていいかな。

夜

「ちよつと！早く異変解決しなさいよ！」

「異変？そんなの起きてないじゃない。」

「何を言ってるの!?!あの月を見なさい！」

「え?・・・あー、なるほど。こりや異変だわ。」

「そんなこと言ってる暇があったらさっさと行きなさい！時間を止めてでも今夜の内に解決してもらおうからね！」

「そんなこと行っちゃって、どこ行きやいいのよ・・・」

そんな会話をしているのが聞こえた。相手は……ありや影狼か。ちよつと答えを教えてあげよう。

「H A H A H A、目的地は永遠亭でございまーす」

「え？あんだ、何言つて……」

言い終わる前に転移してやった。

「ほら、紫さん、貴女も」

「……貴女に名前を教えた記憶は無いのだけれど。」

「まあ良いじゃないですか。さあさあ」

そう言つて紫も転移してやった。

「さて、俺は見学でもしようかね。」

影狼は終始ポカンとしてた。

〈永遠亭〉

「ブリリアントドラゴンバレッタ!!」

「夢想封印!!」

うわあなんだあいつら喧嘩っばやすぎだろ。

「・・・貴方には私の相手をしてもらうわ。」

「おや、気づかれてたんですか。」

「貴方、気配隠して無かったでしょう?」

「そうですね。それで、何故俺が貴女と?」

「それは・・・貴方が私に勝てたら教えてあげるわ。」

「まあそれは良いですけど、あつちの試合を見てからにしません?ほら、なかなか白熱していますよ。」

「いいわ。そっちが貴方のメインなものね。」

く30分後く

「あー、もうう!!負ーけーたー!」

「この博麗の巫女様に勝負挑むなんて、100万年早いだよ。・・・それで?何で紅がい

る訳?」

「まあまあ、今から俺たちも戦うんですよ。危ないんで離れていて下さい」

「戦うだああ!?!何で!?!まさかあんなから仕掛けたんじゃないでしょうね!?!」

「まさか。八意様この人からの名指しですよ。いよいよ私もレアものか・・・」

「あんな何言ってるの・・・まあ良いわ。やるからには本気でやりなさい。」

「さて、霊夢の許可も降りた事ですし、やりますか!」

「そうね。でもこの辺りはもうクレーターよ。どうするの?」

「そうですね・・・少しだけ離れていて下さい」

「そう言うと俺は、足元に魔方陣を作り出した。」

「爆ぜろリアル・・・弾けろシナプス・・・バニツシユメント・デイス・ワールドツ!!!」

「そう叫ぶと、雲が割れ空から平行世界が召喚される。気づくと俺たちはそこに立っていた。」

「これで心置き無く戦えますよ。」

「何かもう、慣れてきたわ・・・」

「それじゃあ、最後にもう一度だけ問いますよ。」

「そう言う俺は、全霊力、魔力、妖力を全て解放し背中には6枚の翼を生やし、厨二病マシマシで言った。」

『汝、我と戦いを望むか』

「「?」」

俺の変わり様、いや、靈力の多さかな?に輝夜までも含めて三人が驚いている。

「え、ええ。そうよ。」

おお、永琳度胸あるなあ。

『よかろう。ならばその力、我に示して見よ!』

俺は体の回りに結界を張る。

「・・・分かった。それを壊せば良いのね。」

永琳は弓を構え、靈力を溜めていく。

「はああああああああ・・・!!」

永琳が弓を放つ。恐らく全力だろう。よし、合格だ。

『ふむ、見事なり。』

パキイイイイン

甲高い音が鳴り響き、結界が割れる。本当はやっと一割程度なのだが。

『我の負けだ。勇敢なる者よ。』

俺は解放していた力を封印する。疲れがどっと襲って来る。

「はああああああ、疲れたああああ」

俺がそう口にすると、何処からかこんな声が聞こえてきた。

「本当に同一人物なのか・・・？」

8話 永琳が欲するもの

前回のあらすじ、永琳試した、合格。以上。

というわけで人を試すという厨二心がくすぐられるような展開に無理矢理持つていった紅くんです☆

さてじゃあ永琳になんかあげよう。相当頑張ってたし。

「さて、永琳さん。何か欲しい物はありますか？なんでもあげられますよ。」

「えっと、どうしてかしら？」

「俺が本気を出した相手にはなにかあげる事にしようって決めたんです。今。」

「い、今……まあいいわ。大人しく従っておきましょう。本当に何でも良いのね？」

「ええ、物じゃなくても、富・名声なんかも自由自在ですよ。何たって全能ですから。」

「じゃあ、私は力が欲しいわ。あんな物偽物の月なんかも使わなくても、姫様を月の奴等から守れる、そんな力を……」

「永琳……」

なんか輝夜が感極まってる。いかん、シリアスは苦手だな。

「じゃあ新しくこの能力をあげよう。」

わざとふざけた口調で言う。秘技シリアス殺し。

「じゃんじゃじゃーん。『攻撃を打ち消す程度の能力』ー。」

永琳の目の前に光る珠を創る。

「えっと、その能力を詳しく説明して頂戴?」

「はい、簡単に言うくと永琳に対して行われる害意ある行動はすべて消去されます。永琳さんが無意識にでも攻撃だと認識したものは消去されるので、背後からのルナライトキャノンとかにも対応出来ます。あ、オンオフ可能です。」

「な、なにそれ・・・ぶっとんだ能力ね・・・」

「で、受け取るにはその珠に触れてください。」

「こ、こ、こかしら・・・きゃっ!」

珠が強く光る。そして少しずつ光が収まっていく。

「これでその力はあなたの物です。」

「えっと、どうやって使うのかしら?」

「体の周りに霊力を纏わせるだけでオッケーですよ。実験してみますか。」

「なるほど・・・こんな感じね・・・え、実験?」

永琳がちよつと焦つたのを見ていない事にして、俺は1.5m離れた所に瞬間移動して、体を鬼に変化させて身体能力を底上げする。そして手に妖力を集める。

「え、ちよちよちよちよつと！何をするのよ！」

「能力張りっぱなしにしておいて下さいねー。せーのッ！」

俺は手に纏わせた妖力を槍の形に変え、投げつける。

『戦神ノ槍』ツ！

レミリアのあれの威力を数百倍に引き上げたものだ。

槍は真つ直ぐ永琳に向かって飛んでいった。

大爆発を起こすが、結界を張ったから周りに影響は出ない。

煙が晴れていって、そこに永琳は・・・

・・・無傷で立っていた。

「おー、成功かー。」

「成功かー、じゃないわよ！死んだらどうするの！」

「蓬莱人は死なないから大丈夫。」

「そういう事じゃないの！・・・あー、もう疲れたわ。」

永琳は相当疲れたらしい。慣れてないからね。

「ところであの槍、投げた瞬間から一切見えなかったのだけれど、一体どんなスピードで

投げたのよ」

そう言われたので、俺は、

「幻想郷最速の天狗の30万倍の速度。」

と答えた。まあ結局、

「わかりずらいわ。もつと簡単に。」

「この直径3cm位の小石で博麗大結界を突き破って月を木っ端微塵にする、何て芸当が余裕なくらい。俺が投げた衝撃消して無かったら幻想郷吹き飛んでましたよ。」

「取り合えず頭おかしい速度なのはわかったわ。」

「因みに、さっきの槍ですが、子供が投げても結界3枚は余裕でかち割るような恐ろしい物なんで、それを無傷で消したその能力の方が強いですよ。」

「あ、そ．．．なんかもう、驚き疲れたわ。」

そんな会話を永琳としていたら、さっきまで放心状態だった霊夢が復活した。

めんどくさい事になりそうだなあ．．．

9話 お怒り、帰宅、引っ越し

はい、紅くんです。今、今世紀最大のピンチ。

鬼巫女が降臨した。

「ちよつと！あれは一体どういう事よ！」

まあいきなり出したもんね。至極ごもつともなお怒りです。

「えつと、あれとは、どつちの・・・」

「はあ!?あんたあの後まだ何かやらかしたの!?前者よ!あの力のこと!」

どうやら見えてなかったらしい。放心してたからね、ちかたないね。

「え、えつと、あれは全力の10分の1程で御座います霊夢様・・・」

うおつと、つい敬語になってしまった。霊夢怖1。

「は?10分の1?あれで?・・・そこに正座ア!!」

「はいいいいい!!」

「いい!?どうして教えてくれなかったの!そりや確かにサニー達に全力出してない事は分かってたわよ?でもあんなだなんて思わないじゃない!大体・・・」

その後お説教はみつちり3時間続いた。

「あゝ、足痛つてえゝ」

「あんたが悪いんでしょ．．．さ、帰るわよ」

「はーい」

ちなみに輝夜と永琳は1時間くらい経った時に帰ってつた。

く博麗神社く

「いやー、長かった。」

「4時間とちよつとじゃない。そこまで長くないわ。」

「そのうち3時間が説教．．．」

「何か言った？」

「いえなにも」

『ちよつと霊夢く？』

急に何も無い所から声が聞こえたかと思うと、空間が裂けて中から金髪が出てきた。

「あら、紫じゃない、どうしたの?」

「どうやら、結界に干渉を仕掛けてる者がいるみたいよ。」

「へえ、どんな奴等なの?」

「神が2人に人が・・・いえ、現人神が1人ね。悪意は無いようだし、ほつといてもいいんじゃないかしら?」

へえ、もう守矢一家お引っ越しの時間なのか。

「じゃあほつとくことにするわ。」

「ところで紫さんはあのととき何処にいたんですか?」

「隙間の中で見てたわ。凄まじかったわね。」

「あら?二人は知り合いなのかしら?」

「うん、まあそれは良いとして、ちよつと用を思い出したんで人里に行つて来るから。」

「え?ああ、そう。わかつたわ。行つてらつしやい。」

よし、お手伝いしよう。

妖怪の山へGO!

く妖怪の山く

「でかいな。ここが妖怪の山か。」

そんな事を呟いてると、声を掛けられた。

「貴様！何者だ！即刻ここから立ち去れ！」

「俺は用事があつてここに来たんだ！立ち去らん！」

「ならば力づくでも！」

目の前に白狼天狗が立ちはだかつた。どうやら杖では無いようだ。残念。

「はっ！」

刀……とは言いがたい位ふつとい刀を振りかぶつてきた。

俺は小指一本でそれを粉碎する。ついでに解析かける。

「なっ……」

「これでも力づくで追い出すかい？」

「……用件を言え。」

「ああ、ありがと。天魔様に会わせて欲しいんだけど。」

「！……分かつた。上に聞いてこよう。」

そう言うとう白狼天狗は飛んでいった。そう言えば名前聞けば良かったなあ。

数分後

「まさかとは思ったが本人が会ってみたいとのことだ。くれぐれも粗相の無いように。」
「ありがと。君、名前は？」

「・・・犬走椿だ。行くぞ。」

あれ、権の家族か？まあいいや。

く山頂付近く

「天魔様。先程の人間を連れてきました。」

「ん、ありがと。下がっていいよ。」

「はっ」

あれ、思ったより子供だな。10歳位？

「キミ、今失礼な事考えなかった？」

「いえいえ、全くそんな事はございません」

「あ、タメ口でいいよ。そっちのほうが楽だし。」

「あ、そう？じゃ、そうさせてもらおうわ。」

「ところで、用って何？」

「ああ、もうすぐ幻想郷に神様二人入ってくるんだけどさ、どうも座標がここの6号めくらいと被つちやってるんだよね。」

「あー、そうなの。それで？」

「このまま山に迎え入れるか、座標を無理矢理移すか。山のトップに指示を仰ごうと思ってるね。」

「ん、いいよー入れちゃって。面白そうだし。」

「ん、ありがと。話のわかる天魔様でよかったわ。」

「いやいやー、それほどでもー。それでいつ頃入って来るの？」

「何なら今すぐにでも」

「じゃあ入れちゃってー。入って来る瞬間見てみたいし。」

「あいよー。じゃ、6号めで待ってるから来いよー」

瞬間移動で6号めまで来た。

距離にして762.8m、移動時間およそ0.00049秒。

10話 お引っ越し完了

「おっ、来たねー。」

「来たねーじゃないよ・・・瞬間移動とか超羨ましい」

「じゃああげよう」

「わーいありがとう」

「それじゃあ瞬間移動渡したしさっさと神様呼び込むか」

「え？もう貰ったの？てか本当にくれたの？やったー後で使い方教えてねー！」

「ほいほーい、それじゃいくぞー、ほい！」

一部分だけ結界を脆くした。そんな芸当が簡単に出来ちゃう紅くんです。

「何をどうしたの？」

「一部結界を脆くしたんだ。すぐ入って来るだろうね。」

そう言い終わった途端、辺りが凄まじい光に覆われた。

光が収まると、そこには神社が建っていた。

「ちえー、空から落ちてくる訳じゃ無いのかー」

「んなわけ無いだろ。ほら、人出てきたぞ」

「へえ、ここが幻想郷かい」

「自然が多くて良いところじゃん」

「ここは山の中でしようか？」

上から神奈子、諏訪子、早苗だ。

「さて、これからどうしようか・・・ん？」

お、気づかれた。行ってみようか。

「ようこそ幻想郷へ。神様がた。」

「あんたらこの住民？とりあえず今の状況を詳しく説明してくれないかい？」

神奈子に言われたので説明することにした。

「ここは幻想郷の魑魅魍魎が集まる山、妖怪の山です。」

「へえ、じゃあここは危険なのかい？」

「いえ、基本は大人しい妖怪ばかりですよ。まあ縄張り意識が強いですが。」

「大丈夫なのかいそれ・・・」

「あ、大丈夫ですよ。こちら、この山のトップである、天魔様です。」

「ど、どうも。」

「へえ、じゃああんた、私たちの事を部下に知らせてくれるかい？襲われても困る。」

「あ、それなら私が既に。」

「へえ、やるじゃないか。じゃあ入って来る直前に結界が脆くなったんだけど、その事について何か知ってるかい？」

「それも私が。」

「・・・へえ、あんた、名前は？」

「滝沢紅と申します。」

「あんた、気に入ったよ。敬語は無しだ。」

「ん、わかった。」

「じゃ、私の家族を紹介しよう。ついてきな。」

そう言うと神奈子は、社の中に入っていったので、それに続く。

「それじゃあ、ここで待っていてくれ。」

数分後

「待たせたね。じゃあ自己紹介から始めようか。じゃあ、諏訪子から。」

「ええ、私!?!・・・えーコホン、私は洩矢諏訪子。外で信仰が足りなくなってきたので来ました。約300万歳です。・・・こんな感じで良いのかな？」

「歳は言う必要無かったと思うがな。じゃあ次、早苗。」

「は、はい！東風谷早苗です！この神社の風祝やつてます！」

「じゃあ私、八坂神奈子。諏訪子と同じで信仰足んないから来たんだ。よろしく。」

「滝沢紅です。見たところ2人は恐らく崇り神と軍神ですよ。もう一人は現人神ですかね。よろしくおねがいます。」

「何でわかったのかはわかんないけど、よろしくー」

「よ、よろしくお願ひします！」

「とりあえず三人にこの幻想郷のルールでも説明しておきましょう。あと早苗さん、そんな固くならないで。」

「す、すみません。どうも初対面の男性は苦手で……」

「あー、御免ね。早苗ったら、男だったら歳関係無く緊張しちゃうんだよ。」

諏訪子がこう言ったので俺が気を使ってやろう。

「じゃあこつちの方が良いですかね。」

そう言つて立ち上がる。

「こつちつてどつち？」

「まあ見てて下さいよ。それっ」

俺は初めて女体化を試みる。

成功した。俺は早苗と同じ位の女子になった。

「おー、すごいー！」

「これでどうかな？早苗ちゃん☆」

ポーズを決めながら言ってみる。女っぽいしゃべり方にして。

「ありがとうございます。紅さんって凄いですね！」

「ありがとうございます。それじゃ、説明しますね」

俺・・・私は、弾幕ごっこやら何やらについて説明した。

「最後に、早苗ちゃん」

「はい、何でしょう？」

「幻想郷には良い妖怪も多いから、無差別に退治したりしないだね」

「え、どうしてですか？妖怪は悪い者なんじゃ・・・」

「確かに外ではそうだったんだけどね？ここでは違うの。幻想郷の住民の7割が妖怪。無差別に退治しちゃうと幻想郷のパワーバランスが崩れちゃう。」

「で、でも・・・」

まだ粘るか。しゃーない、ちよつと脅すか。

「もし早苗ちゃんが無差別に妖怪を退治しようとするなら、私は早苗ちゃんを退治しな

きやいけないよ?」

少しの殺意を出して言う。

「! . . . 分かりました。悪い事をしている妖怪だけ退治するようにします。」

「ん、ありがと。それじゃあこれからよろしくお願いします」

11話 家族が増えるよ

「あ、そうだ。」

一番大事な事を忘れかけていた紅くんです。

入信しなきや（使命感）

「信仰が足りないって言ってましたっけ。じゃあ入信しても良いですかね」

「え、良いの？助かるよ。」

「何か手続きとかあったりするんですか？」

「うんにや、入信するって言ったらもう完了だよ。よろしく。」

「はい、よろしくお願います。」

「おーい神奈子ー！早苗ー！この子入信してくれるってさー！」

「え、マジ？いやーありがたいわー。そうだ、紅って家何処にあるの？」

「いや、家無いから今居候させて貰ってるんだ。」

「へえ、大変だねえ。そうだ、ウチ住みなよ」

「え？」

「あつはつは、良いじゃん！ここ住みなよ！」

何で諏訪子は同意してるんだよ。馬鹿か。

「さ、早苗ちゃんはどう思う。？」

あ、ちなみにまだ女のまま。

「えっと、神奈子様。とりあえず理由を。」

「なに、ただ単純にこつちでの初入信者だったからね。あとは早苗に同年代の友達がい
た方が良くないかな」と

「ちよつとまで。今は女子高生くらいになってるけど普段は男子中学生だぞ？俺。いや
私。」

「じゃあ早苗に男に慣れてもらうの意も込めて」

「むう。か、神奈子様が言うなら。」

「えつちよ早苗ちゃん!？」

「ははは、じゃあさつさと家のひとにお礼してこーい！」

神奈子に投げ飛ばされた。無理矢理だな。まあいいか。

く博麗神社く

「紅ったら、どこ行ったのかしら」

「ただいまー」

「あら、おかえり。どこ行ってたの？」

「友達作り。」

「はあ？」

「あ、あと住む場所決まった」

「あらそう。どこになったの？」

「新しく入ってきた神様のところ。」

「・・・どうしてそうなったのかしら？」

「話の成り行きで気づいたら」

「で、どこにあるの？」

「妖怪の山。」

「はあ!? 危険じゃないの!」

「ダイジヨブヨ。天魔トモダチ。コワクナイ。」

「あ、そ．．．」

「それでは、お世話になりました。時々遊びに来るから。」

「はいはい、またね。」

俺は飛んで妖怪の山に戻った。

く妖怪の山く

「はい、言って来ましたよ」

「よし、それじゃ紅は今から私の家族だ！私を母親だと思ってくれて良いよ!」

諏訪子が母親．．．アリだな。

「そうなるよ、私が父親なのか?」

「となると早苗ちゃんがお姉ちゃんですかね」

そんな話をしてるだけで楽しい。諏訪子可愛い。

「そう言えば紅はどうしてあんなあつさり入信してくれたんだい?」

神奈子が聞いてきた。

「いやー、なんか入信するために幻想郷入ってきた感あるし。」

「入ってきた、と言うとあんたも外から来たのかい。」

「うん、そうだよ」

そんな話を神奈子としていると、諏訪子が突然叫んだ。

「紅！私と勝負しよう！」

12話 新しく母と姉ができました

前回のあらすじ、闘い挑まれた。以上

「入信するために来たなんて嬉しい事言ってくれるじゃん！だから私と闘おう！」

「何がだからなのか全くわかりません」

「私に勝ったら洩矢の名字をあげよう！」

「その勝負喜んでお請けいたします」

即答してやった。

「私が勝ったら何でも一つ言うこと聞いてねー」

「良いですよ。さあ外に出ましよう今すぐに」

外

「じゃあ、始めましょうか。」

「じゃあ相手に『参った』って言わせた方の勝ちね。」

「なあ諏訪子、いいのか名字なんて。」

「何言ってるのさ神奈子。家族何だから良いじゃん。それに、私が勝ったら何でも……
ふふ」

「まあ良いか。本人が良いなら。」

「諏訪子様頑張って下さい!!」

「もちろん。頑張るよ」

「それじゃあまず、こんな事をしてみましょうか。」

二次創作ゲームのキャラが使ってた気がする技を使ってみる。

『『真・深緑結界』!』

本来は体力と霊力の99%を消費する大技だが、今回は自然の力を宿した結界を編む
だけだったから50%で済んだ。

「へえ、相当な量の霊力を使って編まれている。凄いね。」

「そいつはどうも。」

更に俺は3割の妖力、魔力、霊力、ついでに今創った神力を解放する。

「へえ、こいつは私も本気を出さないとダメそうかな?」

その一言と共に大量の岩が襲ってくる。だが受ける。ノーガード万歳。オサレだ。

「私の能力は『坤を創造する能力』だよ。」

完全に岩に閉じ込められた。だが、それを手刀のみで割る。

パキイイイイン

「!?」

「幻想郷では能力名は、○○する程度の能力、つて表すんですよ。」

「……まさか手刀だけで私の岩を割るとはね。今の純粋な身体能力だろ?」

「ええ、そうです。じゃあ次は私の番です。」

そう言う俺はこう呟いた。

『『ステイル・マールター
真典・星殺し』』

次の瞬間、辺りは光に包まれた。

俺の能力は、物を創る時はしつかりとイメージししないと駄目だが、

技を出す時は、技を出している自分をイメージすればいい。

光でやられていた目が見えるようになってくる。

そこには、深さ30m程のクレーター。

そして、無傷の諏訪子。

流石に当てたら死ぬ。だから外した。

「・・・はは、勝てっこ無いや。参ったよ。」

「結界張ってなかったら星ごと死んでました」

「・・・なんて物を使ってくれたんだ」

とりあえず指パツチンでクレーターを無かった事に。

神社の中

「いやー、負けちゃった。強いねえ、紅は。」

「いえいえ、全力でステイルマーター撃つたのはズル見たいなものですし。」

「嘘つけ。お前あれで3割くらいだったろ。軍神様にはお見通しだ。」

「あれ、ばれた」

「あ、あれで3割・・・恐ろしいねえ、全く。」

「それはそうと、これからは洩矢を名乗ってもいいんですよね？」

「ああ、良いよ。約束だからね。」

「じゃあ、俺も何でも言うこと聞きますよ。一つ。」

「え、何で？」

「ステイルマーターは反則負け見たいなものですし。」

「じゃあ遠慮なく」

「一体何を言われるんだか・・・と思っていたが。以外にもそれは簡単な事だった。」

「わ、私を・・・お母さんって呼んで欲しいんだよ」

「・・・・・・・・あ？」

「そ、そんな事でいいんですか？」

「そんな事とは何だ！何回も何回も早苗に頼んだのに一回も呼んでくれた事無いんだぞ」

「！」

「だ、だつてお母さんだなんて・・・恥ずかしいじゃないですか！」

「まあまあ、落ち着いてよ二人とも。顔真っ赤だよ？」

二人ともその一言で恥ずかしそうに俯く。

「じゃあ、滝沢改め洩矢紅。これからよろしくね。早苗ちゃん、諏訪子お母さん。」

「・・・」

「ん？どうしました諏訪子お母さん。」

「・・・やつべえ。すつげえときめいた死んでもいい。てか敬語止めて。」

「じゃ、じゃあ私も・・・お、お姉ちゃんと・・・」

諏訪子を見て気になったのかもな。まあいいか。嫌な感じじゃないし。

「わかったよ、早苗お姉ちゃん」

「！」

早苗が大層驚いたような顔をしている。

「す、諏訪子様・・・これ・・・なんかこう・・・凄いですね・・・」

「ああ・・・すごいだろ」

「ところで、ここでは弟と妹、どっちのほうが良いの？」

「さつきも言ったけど、早苗の男慣れも兼ねてるから、男の方がいいかな。まあ、もう大丈夫だとは思うけどね。」

そう言つて諏訪子は早苗を見る。

早苗は恍惚の表情で天を仰いでいる。

「まあ、これからよろしくね、紅」

13話 カミングアウト

はい、守矢神社に住みはじめて3ヶ月が経ちました。紅です。

最近は家族にビックリするくらい馴染めている。楽しい。

信者も増えてきてるし良いことだらけ。

「紅ー、今日は紅が当番ですよー」

「あ、忘れてた。ごめーん、すぐ作るー」

食事は早苗と日替わりで作っている。まあ俺は創っているのだが。

「いやー、やっぱり紅が作ったご飯は美味しいねえ」

「ありがとう、お母さん」

もう諏訪子の事をお母さん呼びするのが当たり前になつてきた。

「そう言えば神奈子たちがこっちに入ってきた時、外は何年だったの？」

「ん？2009年だ。」

「わお、機械がもう浸透してる時代だ。」

「これなら分かってくれるかな。」

「ねえ、お姉ちゃん」

「どうしました？」

「早苗の敬語はもはや癖になってるらしく、まだ抜けていない。」

「パソコンって知ってる？」

「はい、知ってます。電気と回線が無いので使ってませんが、ここにもありますよ。」

「じゃ、神様転生って言葉は？」

「はい、一応知っていますよ。死んだら別世界にポーン、ってやるあれですね。でもどう

して？」

「いや、流石にそろそろ言つといたほうが良いかな、って思って。俺、一回死んでんだ。」

「「え？」」

「いやー、本物の神様が目の前に二人もいるんだし、信じて貰えるかなーと」

「・・・その神の名前は？」

「あれ、お母さん、転生って可能なことなの？」

「さうとう上位の神であればね。それで、名前は分かる？」

「ごめん、名前は分かんないんだ。あ、見た目が5歳前後の少女だったかな」

「上位にいる幼女の神・・・あいつか」

「あれ、知ってるの神奈子」

「ああ、恐らくだがな。あいつの名前は『フローラ』。日本ではフロラとも言ったか。春と花と豊穣を司るローマの神だ。今は日本に来ていているらしい。」

「司っているものが完全に転生と関係無いっぽいけど」

「花も豊穣も司っているということは、命の創造も出来ると言うことだ。転生出来てもなんらおかしくはないさ。」

「へえー、結構凄い神だったのか。」

「で、本題は？」

「あちや、気づかれてたか。じゃ、本題。俺はもうすぐ別世界に転生しようと思う。」

「・・・それはどうして？」

「ここはとても良い世界だからね。出ていくのは悔やまれるけど、それでも俺は他の世界を見てみたい」

「・・・そうかい、あんたが決めた事なら私は反対しないよ」

「私は反対だ」

「諏訪子様!!」

「期間は長くないと言っても、紅はもう立派な家族だ。いくら紅が強くて心配になる

さ。親心ってやつなのかね。」

「そこをなんとか、お願いします。」

「いや、駄目だね。どうしても行くって言うならね・・・」

諏訪子が一呼吸置いて、言った。

「私も連れてけ!!!」

・・・はい?」

「あのー諏訪子お母様、今なんと・・・」

「だから！私も連れてけつつつてんの！」

「お、おい諏訪子・・・」

「駄目です諏訪子様！貴女が居なくなったらこの神社は・・・」
「ええい神奈子の神社だ！私は行ってくたら行く！」

さて、どうしよう。

14話 連絡をとる

「私を連れていくと言うまでここから出さないからな！」

さて、どうしたものか。紅です。

諏訪子が駄々を捏ねてる。可愛い。

諏訪子連れていくってのはむしろウエルカムなんだけど、問題は、他のものって連れて行けるのかな」

そこなのだ。

「うっ……そ、そうだ！紅の能力で連絡とればいいじゃん！」

なるほど。その発送は無かった。違う、発想。

「なるほど。じゃあ早速。」

創れるかな。神に干渉なんて。あ、出来た。

「じゃあ3人にも聞こえるようにして連絡してみますね。」

能力を行使する。意外と疲れる。

「おーい、神様ー、聞こえるかー？」

『……んー？この声は紅くんですかー？』

「おう、こっちの様子は見えてるのか？」

『はいはい、今見えるようにしますねー。・・・結婚でもしたんですか？』

「してねえよアホ。家に住まわせて貰ってんだ。」

『あ、良く見たら2人は知り合いですね』

『ああ、今の俺の母親代わりだ。』

「代わりじゃなくて本当のお母さんだよ！」

『ふふ、微笑ましいですね。で、用件はなんでしょう』

「俺が別世界に転生する時に他の人を連れて行けるのか？」

『一人までなら行けますよ。その女子高生さんですか？』

「いや、私だよ！フローラ。」

『諏訪子さんでしたか。分かりました。いつ呼び戻しましょうか。』

「次の異変が終わったらで。次に何が来るか教えてくれるか？」

『良いですよ。次は紺珠です。』

「へえ、随分飛ぶな。」

『貴方というイレギュラーが居ますからね。他に用件は？』

「無い。ありがとうな。」

『いえいえ。何か分からない事があつたら連絡してくださいね。』

あ、切れた。

「行けるって。良かったねお母さん」

「うん！良かった！」

「・・・ハッ！おいまて！」

連絡が繋がった時くらいから放心状態だった神奈子が戻ってきた。

「紅、なんでお前はあつさり許可出来るんだ？」

「そう聞かれたらこう答えるしかない。」

「まずお母さん・・・諏訪子は今は母親だけど、それ以前にとてつもない美少女じゃん？」

「まあ、そりや当然だな。」

神奈子は随分と諏訪子を溺愛してる様子。

「その美少女が心配してくれてる。断る理由が無いね。以上。」

「よし、諏訪子を連れて行くのを許可しよう。」

よっしゃ。これで俺の未来は安泰だ。

「・・・ハッ！ちよちよちよつと待って下さい！」

「安心してよお姉ちゃん。時々帰って来るからさ。」

「わかりました。」

早いな。どんだけ心配してたんだ。

そんな事を考えていると、唐突に扉が開いた。

「紅！助けて欲しいの！」

永琳だった。

さて、紺珠伝、開始だ。

キヤラ紹介のコーナー2

く 永夜抄 く

八意永琳（1億以上）

蓬莱の薬を作った張本人。

それによつて輝夜と生活できているので良かったと思つている

主に弓を使い、とても強い。

輝夜の師匠をするくらい。

もともとチートじみていたが、紅から貰った力により、紅以外は倒せなくなった。時折やつて来る月の使者をボコボコにして返している。

それが紺珠ストーリー開始が早まった原因でもあるが、本人は知らない。

蓬莱山輝夜（1億以上）

かぐや姫。とっても美しい。いつも求婚されてた。

毎回無理難題を押し付けて帰らせてた。

スペルカードで使う道具はレプリカだが、蓬萊の玉の枝だけは本物。

どうしてかは本人しか知らない。

自由奔放な所があり、引きこもったかと思えば何処かへいなくなる事もある。

運は良いので外に居る時に月の使者は来ない。

幻想郷では珍しく、露出の無い服を着ている。大和撫子。

鈴仙・優曇華院・イナバ（500くらい）

異変の間、永琳の代わりに診察とかしていた。師匠大好き。

面倒見が良く、子供に良くなつかれる。

メガホンの様な形をした銃を持っているが、指で撃った方が早いから一切使っていない。空気。

てゐ（100万くらい）
名前だけの登場。可哀想だが仕方ない

藤原妹紅（1500くらい）

優しい。ボランティアで道案内をしている。輝夜大嫌い。でも仲良し。
鈴仙とは違い老人に好まれる。

不老不死。強い。

全力のマリス砲喰らっても筋肉痛になるだけ。強い。

く風神録く

犬走椿（2500くらい）

この小説で唯一のオリモブ。

椀の姉。

男勝りな性格と、無に等しいまな板のせいで男と間違われる。
椀は今文と一緒に井戸の中に行っているため不在。

洩矢諏訪子（300万くらい）

可愛い。みんなの神。

見た目は幼女だが、中身も意外と子供。だが母性はある。

紅がお母さんと呼んでくれて相当嬉しかった。

紅を溺愛している。大好き。

神奈子を強く信頼している。

八坂神奈子（180万くらい）

見た目も中身も大人だが諏訪子より年下。

ガンキャノンではない。

諏訪子が紅の事を溺愛してる分神奈子は早苗大好き。

東風谷早苗（17）

お姉ちゃん。可愛い。

とつても若い。ゆかりさんじゆうななさいとは大違い。

面倒見が良い。守矢一家全員書いた気がする。

お姉ちゃんと呼ばれて別の何かに目覚めそうになった。

洩矢紅（14）

洩矢の名字を貰い、諏訪子を母親認定した紅。

3ヶ月の間に誕生日が来た。

相変わらず強い。

諏訪子大好きであり、結婚しても良いと思っっている。

天魔（？）

殆ど空気になってしまった天魔様。
見た目10歳だが、年齢は1万を越えた辺りから数えるのに飽きて止めた。

年下に説教されるとびつくりする位反省する

14話 お説教タイム

「あれ、永琳さん、どうかしたんですか？」

「蜘蛛みたいなのが自然を破壊しているのよ！このままだと人里に侵入してしまうよ！」

「そんなの、壊せばいいんじゃないですか？」

「それが出来たら苦労してないわ！恐ろしく硬いのよ！」

「じゃあ取り合えず行つて見ますか。じゃあ三人とも。行つて来るよ。」

「行つてらっしゃい」

「いってら〜」

「夕飯までには帰ってきてくださいね」

ノリが遊びに行く子供だな・・・あ、紅です。

く迷いの竹林く

ものの見事に竹が枯れてる。

「あつ、あれよ」

確かに蜘蛛だな。

「ああ、こりや月からの地上探査機か何かですね。投げ返しましょう。」

投げ返した。結界が割れたが、すぐ戻したから大丈夫だ。

「さて、元凶の所に行つて説教でもしてきますか。」

「え？ちよ、ちよつと待つて紅。あなた誰がやったかわかるの？」

「ええ。名前は確か・・・純狐さんだったかな？やった理由は嫦娥探しか何かでしょう。」

「ああ・・・ああ。」

「じゃあ行つて来ますんで。」

完全迷彩を自分に掛けてレポート。名指しの。

く地獄く

「いや、ヘカーティアの家なんていつぶりかしら。」

「そうね。もう200年前くらいかしらね。」

「もうそんなに経つのね。嫦娥はまだ生きてるのかしら。」

「ねーねー！友人様！このおせんべ食べて良い？」

「良いわよー。ところでヘカーティア。あの地上探査機はどうなったのかしら。」

「ああ、それなら俺が月に投げ返しておきましたよ。」

「!?!」

なんか永琳も同じ反応だった気がする。デジャヴ。

「あれ木とかガッツリ腐らせてたんで、迷惑だったんですよ。」

「・・・何者？」

「ああ、申し遅れました。私は洩矢紅。貴女達を叱りに来ました。」

「・・・へ？叱る？」

「ええ、叱りに、です。」

「・・・あつはつは！聞いたヘカーティア？私達を叱るんですって！」

「笑つてる場合？神の私にすら気づかれずにここまで近づいて来たのよ」

「ねえ、人に迷惑掛けたらどうする？クラッピーちゃん」

「え？えつとおく、謝る！」

「ほら、こんな子供でもわかつてる事なのに貴女達と来たら・・・いいですか！大体・・・

三時間後

「・・・ですよ！わかりましたか！」

「はい・・・」

いやー・・・わかつてくれて良かった。

「あ、クラッピーちゃん寝ちゃってますね。じゃあ私はこれで。」

「待つて。貴女にクラッピーの名前教えてないと思うんだけど。」

「まあまあ。あ、勝手にあがりこんですいません。これ、お詫びに。」

俺は近くにあつたちやぶ台の上にケーキを三片出した。

勿論手作り・・・いや、手創りだ。

「それでは、さようなら」

瞬間移動。あつと言う間に俺はいなくなつた。

「・・・はむっ・・・！凄い！これ美味しいわよへカーティア！」

「ちよつと純狐。毒でも盛られてたらどうするのよ」

「毒ぐらいじや死なないでしょ！はむっ」

「・・・あむっ・・・あら、本当に美味しいわね。これ」

15話 最後の晩餐は自分は食わない

ウィツス、紅です。今瞬間移動中。

あ、瞬間移動って言っても時間止めてるから好きなかだけ寄り道できるし、今のうちに別れの挨拶でもして行こうかな。香霖あたりから。久しぶりに歩こう。

（香霖堂）

時間停止解除つと。

「霖之助さん、お久しぶりです。」

「ああ、紅か。1ヶ月振りくらいか。あと突然背後に出てくるのを止めてくれ。」

俺はちよくちよく香霖堂に顔を出していた。カットされた部分で。

「今日は何の用だい？」

「いやね、そろそろ幻想郷を出ようかと思ひまして」

「・・・どういふことだい？」

「訳あつて何故かとかは言えないんですが、たまに戻ってくるんで大丈夫ですよ。」

「・・・まあ良いか。もう決まっちゃってしまってるみたいだし。」

「それで、別れの挨拶に来たんですよ。」

「まあ僕は半分妖怪で寿命が長いから、数百年とか言われない限り大して気にしないや。」

「そうですか。それは良かった。それでは、またいつか。」

「ああ、また。」

瞬間移動で霊夢の所へ行く。

く博麗神社く

「霊夢、居る?」

「居るわよ。どうしたの?」

「しばらく幻想郷出るから。」

「・・・しばらくって、どのくらい?」

「長くても5年以内には帰ってくるつもり。」

「そ。ならいいわ。いつてらっしゃい。」

「ありがとうございます。行ってきます。」

じゃ、次永琳。

（永遠亭）

「おーい、永琳さん」

「・・・まさか、もう解決したの？」

「ええ、軽く三時間ほど説教をしたら分かってくれました。」

「さ、三時間・・・ま、まあいいわ。ありがとう。」

「あ、あと俺軽く5年くらい幻想郷出ますんで。」

「え、どうして？」

「それはちよつと言えないんですが、今回の様な事があつたらちやんと博麗の巫女さん
にお願ひしますね？」

「わ、わかつたわ。」

「ありがとうございます。ではまた。」

えつと、最後に天魔の所か。

く妖怪の山 山頂く

「おい、天魔ー。」

「あ、ひさしぶり。どしたの？」

「少しの間幻想郷出るから。」

「あ、そうなの？わかった。じゃねー」

「おう、軽いな。」

じゃあ、戻ろう。

く守矢神社く

「ただいまー、つてあれ、何か騒がしいぞ。」

何かついさつき聞いたばかりの声が聞こえる気がする。きっと気のせいだろう。

「ただいまー。」

「ちよつとあなた名前なんだっけ、まあいいわ食べ物作ってちようだい！」

「ちよつと純狐、それはいくらなんでもいきなり過ぎない？」

「……」

「ああつちよつと！黙って後ろむかないでよ！」

「ちよつと、お母さん。どういう状況？」

「えつとね。へ力達がね、紅の作ったものをもう一度食べたいが為にわざわざ地上に来たらしいよ。どんだけ旨い物作ったのあんた。」

「はあ……まあ良いです。何が食べたいですか？ついでに三人も。」

「私肉じゃが！」

「御免ね諏訪子……私は何か麺類を」

「良いよへ力。私は食事な気分でも無いからバニラアイス。」

「私たちも良いのか？私は何か飲み物を出してくれ。」

「えつと、じゃあ私はティラミスをお願いします。」

「純狐さん遠慮無いつすね。まあ良いですけど。ほいっと。」

指を一回鳴らすと、全員の前に食べ物が見れた。

「肉じゃが久し振りだなー♪」

「あら、素麺。見たことはあるけど食べるのは初めてかしら。」

「うわ、このアイス白くない！クリーム色してる！」

「・・・ペプシキューカンバーとか嫌がらせかよ。」

「H A H A H A、冗談だよ神奈子。それは河童の所にでも置いておこう。本当はこの玉露だ。」

「このテイラミス、金箔が乗ってますよ！」

〈30分後〉

「いやー、美味しかったー！自分の以外の肉じゃが食べたの初めてかも！」

「素麺も食べやすかったわ。」

「アイスが牛乳の味したよ！美味しかったよ流石紅！」

「はは、ありがとうお母さん」

「諏訪子。あんたこの子にお母さんなんて呼ばせてるの？」

「いいじゃんへか。早苗どころかその先祖にすら一回も呼ばれたことないんだもん！」

「こんな美味しいテイラミス食べたの初めて・・・」

いやー、自分が作ったものを食べてもらうってのは気分がいいな。
さて、そろそろ時間かな？

キヤラ紹介のコーナー3

純狐

嫦娥をやたら恨んでいる。

だが、恨みを純化し過ぎた結果、『恨んでいる』と言う結果だけが強くなってしまい、どうして嫦娥を恨んでいるのか忘れてしまった。本人は気にしていない。

一応人妻だが、とても美人であり、子供っぽく、天真爛漫。

遠慮をしない。

ヘカーティアとクラウンピースという地獄の存在が近くに居るため、穢れを気にしない。

暇潰しに地上に遊びに行くくらい。

地上探査機を使った理由は、最近冷え込んで来て、家からでるのが億劫だったから。

ちなみに幻想郷では初夏あたりだが、月では秋の終わりくらい。ちよつと寒い。

紅の料理をとても気に入っていて、その為に守矢神社に攻めこんだ。

場所は永琳に聞いた。

好きな物は和菓子と肉じゃがだが、作るのが面倒なのでカップ麺ばかり。

ちよつとだけ太ったが、すぐ戻した。

嫌いなものはお化け。怖い。あと嫦娥も嫌い。

ヘカーティア・ラピスラズリ

地球、月、異界に三つの体を持つ地獄の女神。

幻想郷は異界に判定される。

純狐の保護者の様なもの。若干呆れてる。

守矢神社に攻めこんだ時は申し訳ない気持ちで一杯だった。

変なTシャツを着ているが、割りと似合っているので誰も何も言わない。

肩が出ているのでとってもセクシー。へそも出てる。

諏訪子とは仲がまあまあ良い。神奈子とはあまり接点がない。

神奈子が生まれる40万年前、諏訪子が80万歳の時に知り合った。

面倒見が良く、心を許した者にはとても優しいが、怒るとけつこう怖い。

気分が良いときにたまに語尾が「ゝなのよん♪」になるが、本人は気づいていない。

無意識のうちに出ている。

顔に出やすい性格。単純とも言えるが、気が短い訳ではない。

結構クラウンピースを溺愛している。

好きなことはクラピを愛でること。膝枕したりする。

嫌いなことは純狐のお守り。めんどくさがっているが、実は内心楽しんでたり。

クラウンピース

ヘカーティアの部下。地獄の妖精。可愛い。

松明の火を見ると狂ってしまう。

鈴仙とは違い、幻覚を見せるのではなくヒヤツハー状態にさせる。

だが、ヒヤツハー状態の人はちよつと怖いので普段は松明を持っていない。

本編では、妖精でありながら5ボスになり、そして耐久二枚という鬼畜っぷりを存分に披露したが、この作品ではそんな鬼畜な事しない。優しい。

見た目相応の性格であり、若干天然。

礼儀はあまり良くないが、お菓子を食べる良いか訪ねるなど、最低限の礼儀は持ち合

わせている。

好きなものはプリン。あと寝ること。幸せ。

嫌いなものはお化け。怖いテレビとかを見てしまったら純狐と抱き合って寝る。

別れ、悲しみを乗り越えて人は強くなつていく

最終話 別に今生の別れつて訳じゃねえんだ

『おーい、神様ー』

『お、とうとう思念だけで会話するようになりましたか。人間止めちゃったんじゃないですか?』

『大丈夫だ。自覚してる。それで、今からこいつらに別れの挨拶をするわけだが』

『はい、なんでしよう。』

『俺が一回強く手を叩いたら諏訪子と一緒に転送してくれないか』

『わかりました。手を一回叩いたら、ですね』

『助かる。』

『君!名前何だっけ!』

『ちよつと純狐、失礼でしょそれは。』

『はは、良いですよ。洩矢紅です。』

『・・・ちよつと諏訪子。あんた名字まであげるとか、どんだけこの子好きなのよ』

『家族だし良いじゃないかー。へ力だつて家族が名字違つたら嫌だろ?』

「その二人はどうなるのかしら？ 家族じゃないの？」

「神奈子は神だから無理、早苗は代々続く洩矢直属の風祝の東風谷の一族だから無理。」

「あ、そ……」

「さて、突然ですがここで皆にお別れの挨拶をしようと思います。」

「本当に突然だな……まあ良いか。」

「私、洩矢紅と洩矢諏訪子は、5年ほど幻想郷を出ようと思います。」

「え、諏訪子が外の世界に行くってこと？ 信仰は大丈夫なの？」

「大丈夫ですよへカーティアさん。信仰は私があつてもし続けますし、外の世界とは少し違います。」

「あ、そうなの？ じゃあ安心したわ。」

「ちよつと待って！ それじゃあ紅くんの料理を5年も食べられないって事!？」

「あ、大丈夫ですよ。純狐さん、念話って使えます？」

「え、使えるけど……」

「じゃあそれを別世界や別次元にも届く様に改良しますんで、念話で食べたいものを言ってくれば、直接できたてを送りますよ。」

「よ、よかつたあ……」

「あんたただけ心配してたのよ。」

「他に質問がある人は？」

「はい」

「はい神奈子、どうぞ」

「そこは神の行つても大丈夫な世界なのか？」

「大丈夫ですよ。ここみたいな能力持ちは一人もいませんし、神の存在自体うやむやなので、神力を感知できる者は存在しません。」

「そう？じゃあ良かったわ。」

「じゃあお母さん。お母さんから何か言うことがあれば。」

「ううん、何も無いよ。どうせすぐ戻ってこれるんだ。大丈夫さ。」

「そうか。あ、神奈子。ちゃんとお姉ちゃんを・・・早苗を守つてやれよ？」

「無論、言われるまでもないさ。」

「それじゃあ、行くとしますか。」

「すぐ戻つて来るとしても、やはり会えなくなるのは寂しいな。」

「まあまあ神奈子。多分紅に言えばいつでも帰つて来れるよ？」

「いや、良いよ。思いつきり楽しんできてくれ。」

「うん、ありがと！神奈子！」

「それじゃあお母さん、俺に腕に掴まって。」

「うん、わかった。」

「じゃあ、行くよ?」

「行つてきます」

「行つてらっしゃい。」

大きな音が辺りに響きわたる。

「行つたか・・・良かったのか? 早苗。何も言わなくて。」

「はい・・・言ってしまったら、多分・・・泣いてしまいました。心配は掛けたく無いの

で……」

「……そっか。優しい子だね。早苗は。しつかり『お姉ちゃん』してるよ。」

「はい……ありがとうございます……神奈子様……」

「……帰ろうか。純狐。」

「ちよーつとお前らあ！なあにそんな空気になつてんだあ！」

「ちよ、ちよつと純狐?!」

「別に今生の別れつて訳でもねえんだ！ならせめて笑つて帰りを待つてやるのが！
待つてゐる者の役目だろうがあ!!」

「……ふふっ」

「あはははは！あんた良いこと言うね！純狐とか言つたっけ？ありがとうございます、元気出たよ！」

「そうですね、私たちに出来ることは、待つてることだけですもんね！」

「そういうこつた。じゃあ私らは帰るから。じゃあな。」

「はあ……疲れたー。熱血キャラって体力どうなってるのかしら……」

「純狐……あんたは優しいね……」

「んー？優しい？なんのことだろ。私はただ、空気を読んでない発言をしたただよー？」

「……ふふつ、そうね。」